

っている。中には、配偶者からのDVなど深刻な問題も含まれているにもかかわらず、こうした問題や悩みを、「行者ゆえに行を積まされている」と宗教的に解釈し、独力で克服しようとする女性が少ない。そして、それがゆえに問題がいつまでも「個人的な問題」の範疇を出ず、表面化してこないのである。これは、女性下位という可視的な性差別に対し、差別の経験を共有しつつ、協同して改革を進めている既成仏教教団の女性の在り方とは随分異なっている。

昨今は、女性修験者とジェンダーという直ちに「大峰山女人禁制問題」がその最たるものとして取り上げられ、先鋭化の動きを見せている。しかし、修験道教団には、この問題以外にも数多くのジェンダーをめぐる問題が存在しており、未だそれが教団全体に関わる、組織的・構造的な問題として認知されていない面がある。大峰山の問題についても、そうした諸問題に計慮しながら、より広い視点から考察を進めていく必要があるだろう。

パネルの主旨とまとめ

小林 奈央子

本パネルでは、伝統的な宗教教義、あるいは宗教的規範と、新たに獲得された近代的な思考や社会制度などとのはざまにおいて、宗教的権威から周辺化されがちな女性たちが「伝統」と「近代」との間で生じる葛藤をどのように受け止め、克服して

いるのかを、ジェンダーの視座を通して明らかにすることを主題とした。そして特に、就業、結婚、出産など女性のライフイベントとその折々で立ち現れる宗教との関わりに着目し、女性たちが「伝統」か「近代」かの二者択一的な選択をするのではなく、その両者を行き来しながら、双方をつなぐような重層的で複合的な選択をしている実態について、四人の発表者が、それぞれの調査フィールドを事例に報告をおこなった。近代が伝統を凌駕・変革していく、あるいは逆に、近代に抗って伝統的なものが呼び戻されるというような一方方向ではなく、女性たちが「伝統」と「近代」の間を往還しながら、単なる両者の相克を超えた多様な選択をしている様相を明らかにすることを本パネルの主題とした。

その点でいえば、中国雲南省西双版纳タイ族の出産を取り上げ、近代医療が浸透する中でも、女性たちが伝統的な出産のあり方や知識を適宜利用し、「伝統」と「近代」の枠組みをゆさぶるような実践をしている点に着目した磯部報告は、本パネルの趣旨を最もよく反映したものであったと思われる。コメントの黒木雅子氏も、出産に影響する知識体系が男性中心的な上座仏教から近代的な知識体系に移行しても、女性の周位的位置づけにかわりはないが、「しかし、そこで、女性たちがこの二つの知識体系を行き来しながら、状況や必要に応じて主体的に出産方法を選択している」ということは、伝統宗教と近代の知を利用しながら生き延びる弱者の智慧として興味深い」との評を寄せられた。このように女性たち自身の選択が、従来の社会の在り方に変化をもたらしている事例に対し、他方、社会の変

化によって要請される女性像が変化している事例を取り上げたのが井上報告である。井上は、ポスト社会主義のロシアにおいて、ロシア正教会がアレクサンドラ皇后を通して描く「良妻賢母」像が近年存在感を増している状況を報告し、ソ連崩壊後の経済・社会変動がもたらした「家族主義」への転換がこの背景にあるとした。また、こうした「良妻賢母」像は「伝統」の再発見ではあるものの、実際にはロシア女性がこれまで経験したことのない「新しい役割」でもあると指摘した。

また日本の事例として、カトリック医療施設内における「天使の病棟訪問」と呼ばれるクリスマス行事を取り上げたのが石井報告である。近代的な病院の中でカトリックの伝統を意識する数少ない機会であるが、近年は中心的な担い手である看護師資格を有する修道女が減少しており、近代医療の現場でカトリックの理念を継承していくことの難しさについて言及した。また、女性修験者が、「在家」宗教者であるがゆえに、近代的な家庭生活との間で経験する様々な軋轢と、それを修験道の教えの中から克服していく過程、およびその問題点について小林が報告した。

以上四つの報告をふまえ、黒木氏からは、「ジェンダーの視点」とは何かパネリスト間で再確認が必要ではないかということと、「伝統」と「近代」の枠組みが大きすぎるのではないかという指摘を受けた。しかし、調査地や研究テーマを異にする研究者が、ジェンダーという共通の切り口から議論する機会を持てたことは意義のあることであった。今後もこのような場を継続的につくっていきたい。

現代沖縄の社会、文化にみる

「本土化」と「沖縄化」の相互作用

代表者・司会 村上 興匡
コメンテータ 具志堅邦子

沖縄の死者慣行にみる

「本土化」と「沖縄化」の相互作用

村上 興匡

一九七二年の本土復帰にともない本土の慣習（葬祭業者による葬儀補助、仏教寺院による告別式葬儀）や、法律（「宗教法人法」「墓埋法」、人間や業者（葬祭業者、石材業者）の沖縄への流入が進み、それが沖縄の死者慣行に変化を与えている。これは、いわば文化移入の側面でもとらえることもできるが、それを促進した背景には、都市化、近代化の影響がある。特に二〇〇五年以降、本土及び島嶼地域からの大量の人口が南部都市地域に流入しており、那覇周辺地域で大規模な都市再開発が進んで、地域社会、生業および地域の間関係に変化を与えたことが、本土的な慣習を取り入れる後押しをしていると考えられる。

「本土化」の一方で、所有地の中に自分の墓をもつ欲求が強かったり、本土式の家墓の中にも、従来の沖縄の墓と同様、段差や骨灰を撒ける穴があったり、葬儀や清明祭などの行事に多